

茗溪学園 中学校・高等学校

“Study Skills を身につけさせる教育”

広報部長 田代 淳一

1. 経緯

茗溪学園中学校高等学校は、筑波研究学園都市にある中高一貫共学校です。学年に5～6クラス、全校約1300人の生徒数です。敷地内に学寮を持ち、中学1年生から高校3年生まで約100人の生徒が暮らしています。

1979年に筑波大学、その前身の東京教育大学などの同窓会である茗溪会が百周年記念事業として設立、開校以来当時の“知育偏重という中等教育批判に応える研究実験校”と位置付けられてきました。高い学力とともに全人格を涵養し世界で活躍できる子どもを育てる教育が本当に可能かということに、“理念”や“気分”ではなくカリキュラムでアカデミックに挑戦してきた学校です。寮を持ち、全国区として、また帰国子女教育研究協力指定校として海外からも多くの生徒を迎えてスタートしました。

開校以来、カリキュラムとして重視されてきた考え方は“世界に飛び出しても通用する学力を身につけさせる”ということです。当然高い英語力は不可欠ですが、英語以前の「学ぼうとする意欲・学び方や方法・自己修正の方法・困難を自分で切り拓き自分で自分を伸ばす方法」を日常の教科指導や教科外指導で身につけさせていく。当然、最初は易しいレベルから、徐々に繰り返し繰り返し体験させ行動させながら思索させ試行させて高いレベルに導いていく。6年間かけてこのような“人格”を形成し、大学で学びたいことはその先の進路まで体験させながら見据えさせてみつけさせる。初代校長岡本稔先生の指導のもと、そういう理想的なカリキュラムづくりがなされてきました。開校当初はこういう教育姿勢を“自分で考え行動できる子どもを育てる”と表現していましたが、茗溪教育の真価をご理解いただくのに多くの言葉を要するため、途中から“Study Skills を身につけさせる教育”と言い換えています。

2. その成果

私たちは“世界に飛び出しても通用する学力”つまりStudy Skillsを、最初の知識獲得から疑問点の抱き方、調査方法、討論方法・・・というように各ステップに分け、最終的には価値観の受容から行動の変容まで定義します。(表1参照、次号に掲載)

勿論、日々の実践の中で議論し修正を加えていますので、変化させながら。中学1年生では国語の時間はさっそく“読み方”を学習します。これは構造読み、形象読み、主題読みなどの様々な読みの技法を一つひとつ学んでいきますが、同時に“二段階討論法”という、小グループ討論からクラス全体への討論へと発展させる討論法も学びます。ここで討論とは何か、ルールや討論から得られるものなどを賑やかに楽しく体験しながら学びます。これを6年間積み重ねることで、勿論どんな文学作品であろうと評論文であろうと分析し“読める”力が身につきますが、それ以外の多くのSkillsも身につけてきます。

歴史では、入学時に子どもたちが抱いている歴史イメージ、「歴史って人の名前とかいろいろ暗記するだけの勉強なんだ」を壊すことから中学1年生は始めます。例えば『鎌倉時代～名字の地の保障を～』という授業では、自分が実際の歴史上の人物になった場合どのような施政を行うか、当時の文化や生活の中で何に価値を感じどう生きようとしたかを子どもたちと考え、そこから歴史の必然性と意外性に気づかせていく。歴史は生きたものであり、考えていく楽しさをたくさん含んだ題材であることを教えていきます。

化学でも、理科嫌いな子どもが抱いているイメージ、「難しいことばかり暗記し、役に立たない」を払拭していきます。最初から原子概念を導入し、原子の“手”に気づき、原子同士の組み合わせのルールに気づかせ、化学式を読み書きできるようにします。そしてボーア理論を教えると、